

「The Black History」は、これまでの消防人生における失敗や反省事例を、先輩職員が「しくじり先生」となり後輩に伝えるコーナーです。書店でも「失敗から学ぶ」といったビジネス本が数多く並んでいますが、たしかに、失敗は成功よりも多くのことを学ぶ機会でもあるのです。先輩たちの失敗に感謝しつつ、しっかり学ばせていただきます！

さて、今回、赤裸々に失敗談を寄稿して下さったのは、消防局救急部救急課に勤務する藤山係長さんです。



## 私の黒歴史

# The Black History

今回の謝り人 : 大阪市消防局救急部救急課 藤山 圭典

平成6年4月に拝命し、勤続25年を過ぎた私が『人とのつながり』について教訓にしていることをお伝えしたいと思います。

今から9年前の平成23年3月11日に発生した東日本大震災。

当時、消防司令補として消防局の警防課に勤務していた私は、慌ただしい事務室で情報収集や他部署との調整事務をこなしながら、自身としても、いつ災害派遣されてもいいよう荷物をまとめていました。

しかし、次々と緊急消防援助隊が派遣される中、私はただ見送るばかり。派遣が決まった同僚のことが羨ましく、いら立ちを抑えられずにいました。

「なにしてんの」「そんなんすぐわかることやん」「もっと考えなあかんのんちゃうん？」

気がつけば、同僚にかけられる言葉もいつしか厳しいものとなり、自分の焦燥感をぶつけている自分がいました。それにもかかわらず、その同僚は何も言わず、黙々と調整作業を手伝ってくれました。

その後年月が経ち、高度専門教育訓練センターで勤務していた平成30年7月には、西日本豪雨災害が発生し、私は緊急消防援助隊の派遣バスの車長を命じられ、派遣地の広島県に向けて出発しました。岡山県を過ぎたころ、バスのエンジン警告ランプが点灯、さらにエンジン不良のアラームが鳴り、目的地まで走るのが困難な状態となりました。

悩んだ私が消防局へ連絡したところ、電話に出たのは東日本大震災の対応で私のきつい言葉を受け止めてくれたその同僚でした。

藁にもすがる思いで事情を説明したところ、すぐに現在地から近い修理工場を手配し、そこまでの道順や修理後の書類手続きまで調整してくれました。

おかげさまで、無事修理を終えて、予定時間より少し遅れて目的地に到着できました。

任務を終え大阪へ帰る隊員を乗せて深夜の高速道路を走るバスの中で、私はずっと、『人とのつながり』について考えていました。

厳しい口調できつい言葉を発していたこんな自分に、快く手を差し伸べてくれた同僚。もし、自分が逆の立場なら快く対応ができていただろうか。言った方は忘れても、言われた方は忘れないだろうな。『人とのつながり』は人生の大いなる財産なのに、できてなかったなあ。どうしてそんなことに気づけなかつたんだろう・・・。

今回の寄稿にあたり、私の未熟さ、失敗談を通じて、『人とのつながり』は今日、明日ではなく、5年後、10年後に大切な形となって生きてくることをお伝えすることができると思います、寄稿させていただきました。

まとまりのない文章になって申し訳ありません。ただ、これだけは言わせてください。

こんな私を受け止めていただいた皆様、  
あの時は本当にすみませんでした。  
そして、ありがとうございました!!